



関西からのメッセージ集団 朝日21 関西スクエア 会報

Asahi Kansai Square21

2011.10

No.
138



なごやかに会員交流会

各界の著名人らが集う朝日新聞大阪本社の「朝日21関西スクエア」が主催する公演とトークセッション「関西・大阪の都市文化を考える」が26日、大阪市北区のホテルであった。2011年度の会員交流会も開かれ、約100人が出席した。

公演では、町の魅力を伝える「なにわの語りべ」活動をしている大阪ガスエネルギー・文化研究所主席研究員の栗本智代さんが、「曾根崎心中」の主人公が心中に向かった道をたどりながら、梅田の史跡や発展の歴史を紹介した。

トークセッションでは、雑誌「上方芸能」発行人の木津川計さんが「大阪文化には多彩な型があるのに、土着的で庶民的な『河内型』だけが肥大化して語られる。正しい大阪像の発信が必要」と指摘。フリープロデューサーで大阪大学招聘教授の茶谷幸治さんは「経済的支えや文化を担う人材を失ったのが課題」と語った。



会場での記念撮影(左から)「なにわの語りべ」劇場スタッフの西島宏さん(シイ)エヌ代表、渡辺雅隆編集局長、ヴァイオリニスト西村恵一さん、関西スクエア企画運営委員の更家悠介さん、栗本さん、木津川さん、茶谷さん、横井正彦、大阪本社代表

「なにわの語りべ劇場」 栗本 智代 (大阪ガスエネルギー・文化研究所 主席研究員)

この日の「なにわの語りべ劇場」の演題は、「曾根崎心中から“うめきた”まで」。総合監修の大阪ガスエネルギー・文化研究所主席研究員の栗本智代さんが語りを担当。話の展開に合わせて写真やイラストを映し、ピアノとバイオリンの生演奏が彩りを添えた。

公演は2部構成で、第1部のテーマは「曾根崎心中」。物語の筋を追いながら、梅田周辺の古地図を示し、お初と徳兵衛が心中に至るまでの道をたどった。

栗本さんが「今はホテルやビルが立ち並ぶ梅田の繁華街も、もとは何もなかった泥と畑」と語り、江戸期の梅田は心中の道行きのコースに選ばれるほど寂しいところだったことを示した。語りの合間には、「曾根崎心中」に出てくる貨

幣の単位や時の数え方などの解説も加えられた。

第2部では、梅田の明治期以降の急速な発展の歴史を紹介。「梅田は、辺り一面に広がっていた田畑を埋め立ててできた場所なので、『埋め田』から『梅田』になった」とする説も示された。

栗本さんは、1874(明治7)年に誕生した大阪駅のその後の変遷の様子を、順を追って説明。阪神や阪急といった鉄道の開通や、デパートなど商業施設の競争の様子も振り返り、梅田・北ヤード(うめきた)の開発まで語った。

最後に、「時代の最先端を行くこの都市のDNAが、人々をあっと言わせ、注目を集め、大阪人が誇りを持てる街へと導いてきた」と締めくくった。

「関西・大阪の都市文化」トークセッション

情緒的で豊かな気質

木津川 かつて宮本輝が「花の降る午後」という小説を書いた。作品紹介では「異国情緒あふれる神戸。愛する夫を失った後、フランス料理店を経営する女性に訪れた恋と……」とくる。京都に置き換えると「雪の降る午後」。「歴史と伝統の町京都。夫を失った後、京料理店を経営する……」となるだろう。大阪は無念だが、「銭の降る午後」だ。「欲望渦巻く都市大阪。だまし合った夫を失った後、たこ焼き屋を経営する……」となるだろう。こういうイメージを発信してきた。

栗本 昔から情けない都市ではなかった。元禄時代は上方の中心だった。なぜこうなってしまったのか。

茶谷 大阪の気質は情緒的で豊かだった。庶民の心意気は残っている。ダメになったのは経済的支えを失ったから。大阪で流通していた銀が金に替わり、資産がかなり減殺された。蔵屋敷も国有財産として没収された。大名貸しもできなくなった。文化を支えていた財力が消えた。

木津川 嘆いていても仕方ない。文化が花開くためには、どうしても経済＝都市力が必要。ぜひ、薬品産業を生かしたバイオ、家電の技術を集めた新エネルギー産業、東大阪や八尾の中小企業を生かした環境関連産業を発展させるべきだ。

茶谷 確かに産業が文化を発展させた。しかし、高度成

長やバブルを経て、日本文化が芽生えたか。東京文化が花咲いているか。京都も過去の文化はあるが現代に新たな文化はない。大阪は土着性を生かして、何か新しい文化を世界に打ち出せるのではないか。

木津川 例えば上方落語「天満天神繁昌亭」の成功がある。担ったのは地の者、年寄りだ。小さな寄席ひとつで、近隣商店街の売り上げが伸びた。町おこしの典型を、大阪の文化が示した。

茶谷 観光地だけでは、豊かな文化を育てることにはならない。いま住んでいる、利用している人たちで大阪の文化を盛り上げていってもらいたい。

キーンさん呼ぼう

木津川 茶谷さんと打ち合わせの際、ある人物を大阪の市民にしようじゃないか、という話になった。

茶谷 米コロンビア大学名誉教授のドナルド・キーンさんです。今度、日本に来られた。有名な講義は曾根崎心中、つまり近松門左衛門。大阪にとてもゆかりの深い人で、大文学者だ。この人をどうにかしてお招きして、大阪に住んでもらうわけにいかないか。

木津川 ぜひ、大阪市民になって頂きたい。名誉市民でもいいけども、少なくとも半年は住んでもらいたい。世界に大阪が発信される文化的大ニュースになるだろう。

伝統・文化 4種が混在

木津川 計（「上方芸能」発行人）



大阪の現下の困難は二つある。都市「格」の低下と、都市「力」の低下だ。格とは文化、力とは経済だ。経済はこの10年、20年どんどん低下した。

大阪のイメージが大変悪くなっている。全国の人から憧れのまなざしで見られていない。魅力ある都市と映っていない。大阪の一面だけが肥大化して吹聴されている。

私は「上方芸能」という雑誌を出しているが、名刺を渡すと「吉本とどう関係ですか」と聞かれる。上方芸能といっても、文楽や上方歌舞伎、狂言など様々。漫才は一部分だが、言ってみれば吉本情報が多すぎる。

ひとくちに大阪文化といっても、四つを混在させながら成り立っている。①宝塚型＝都市的で華麗。大阪にもある。②河内型＝土着的で庶民性。③船場型＝伝統的大阪らしさ。④千里型＝学術、研究、機能性だ。

全体として大阪文化なのだが、一般的には②の河内型で捉えられている。

これは、他の三つを発信してこなかった面もある。正しい大阪像を全国の人たちに持ってもらうために、これから何を発信しなくてはいけないかを考えていく必要がある。

都心回帰の力 集めよ

茶谷 幸治（大阪大招聘教授）



なにわの街をぶらぶら歩く「大阪あそ歩」は今、150のコースと、200人を超える市民ガイドがいる。2008年以降、延べ1万人が参加した。

大阪文化はひどい状況と思っていたが、すそ野の広がりには決して捨てたもんじゃない。歴史や風土、食べ物への市民の興味や関心は強い。ただ、どれもゲテモノ、安物に近いも

ので、上質で高度に洗練されたものがないのが問題だ。

明治から大正、昭和にかけて、大阪は「東洋のマンチェスター」になると言ってどんどん工業化し、煙の街になった。鉄道が発達して郊外に住めるようになったことで、文化を支えた人たちが大阪から逃げ出した。こうして伝統芸や衣装、食べ物も抹殺された。

ただ、梅田が再開発されているように、大阪への回帰も始まっている。そのエネルギーを集めるべきだ。

まず、観光や歴史に携わるいろんな協会を連携させ、受け皿になる団体をつくる。寄付だけではまかなえないから、ニューヨークや東京のようにホテルにベッド税をかけて資金を充てる。行政はそれくらいの思い切った措置をしないと、かろうじて残っている文化も消滅しかねない。

天満の天神さんの宮水

みやみず

土居 年樹 (天神橋筋商店連合会会長、日本の観光カリスマ百選認定)



東日本大震災ルポ『原発難民』を出版

栗野 仁雄 (ジャーナリスト)

天満は明治の頃まで130軒ほどのつくり酒屋が存在していたと言われている。それは地下水が良かったからだ。しかし地下鉄・JR東西線の開通などで地下の水脈が寸断され、汚染が広がって、井戸水は絶えてしまった。

私の「夢もう一度」の思いが念ずれば通じる様な出来事が起こった。関西大学の楠見晴重学長(地質学の権威)との出会いである。縁あって天神橋筋商店連合会と関大は友好協定を結んでいる。「土居さん、天満で地下を掘ってみませんか。ええ水が出ますよ」。これを聞いて私は動き出した。何はともあれ、天神さんにお願いだ。「境内の何処かを掘らせてくれませんか。ええ水を掘り当ててみたいのです」。「境内に五知の水といわれた井戸があった。そのあたりを掘ってみたら」。寺井種伯・宮司の嬉しい返答に早速、試験掘りを開始した。70メートル間の地層を検出しよいよ学長の出番である。「第三帯水層(70メートル)の水には不純物が無いと推測される」といい返事が返ってきた。寺井宮司はすぐにも本掘をしたいと言う。早い時期に天満の良水が出るだろう。「この水をどう活かすか」が次の課題だ。天満宮、関西大学、天神橋筋商店連合会が三位一体となって社会に役立つ活用法を考えたいものだ。本掘り作業開始は10月4日だ。



長期の東北取材をなんとか本にした。タイトルは版元(潮出版社)の意向で『原発難民』だが、福島県の人々より、岩手県や宮城県の津波被害の人たちのドキュメントが多い。3月22日、伊丹からリュックを背負い山形空港に入りバスで仙台へ。ホテルは全く取れず、寒くて寝袋で仙台駅に泊ろうと思ったら、駅にも鍵がかかっていた。最後は勝手に青葉区役所の廊下に泊り込んでの「サバイバル取材」。石巻や仙台市の沿岸部では、16年前のあの神戸市長田区のような光景が延々と続き、立ちつくすばかり。4月からは神戸からマイカーで取材に出かけた。

悲しみをどこかお笑いにも昇華できるような関西人とは違い、黙々と耐える東北人の姿は辛かったが、可能な限り多くの東北三県の被災者の声を集めた。遺族取材なども多い中で、「欽ドン」で知られた元人気タレントの「気仙沼ちゃん」(白幡美千子さん)の元気な姿には救われた。娯楽テレビに疎い私が彼女のことを知らなかったので、「この辺の人はなんで地名にちゃんをつけるんや」と滑稽なことになったが、民宿を経営している白幡夫婦と親しくなった。彼女の「不便さのありがたさを感じている」は印象的だった。同世代のよしみか、五十代の男性の取材が多かった気がするが、振り返ってみれば彼らの多くが独身で驚いた。原発問題はもちろん、自然災害と人間、大都市と地方、資源問題・・・様々なことを考えさせられた。いつものことだが、頭ではなく足で書いた著作を御一読いただければ。税込み1365円。

スケッチかんさい



台風あとの紀の川

案じていた台風12号の被害見舞いのため、和歌山県有田川町の会社を訪ねた。幸い、大した被害がなく安堵した。帰り路、紀の川沿いに住む知人が丁度在宅だったので立ち寄った。竹房橋付近まで台風あとの増水のさまを見に行くと、川堤には冠水のツメ跡が残り、中洲には流木が沢山乗り上げていた。奈良・和歌山にできた土砂ダムの濁流や孤立した集落の人々の避難のご苦労を思うと、紀の川の濁流より、土砂ダムの安全確保の方が先決だと考え、早々に紀の川を引き上げた。このあたりは、例年なら鮎釣り愛好家でにぎわう場所だが、今年はそれどころではない。私も、知人も何度も訪れている場所だが、そのさまがわりぶりに言葉もなかった。

和歌山県紀の川市竹房・竹房橋付近

あつた ちかよし
熱田 親憲

号外は記念品

中島 靖（編集センター長）



新聞社の媒体のひとつに「号外」というものがあります。大きなニュース、と新聞社が判断した時に、街頭などで配っています。昔の「かわら版」そのもので、ペーパーメディアの原始的形態ともいえるでしょう。

私たち編集センターは、記事の価値を判断し、見出しをつけ、レイアウトして紙面を作る部署です。号外を発行するかどうかの判断もしています。

テレビはもとよりネット社会のいま、号外は少し古くさい手法かもしれません。しかし、ニュースをキャッチした後、数時間あれば大急ぎで紙面の体裁を整えて印刷し、街角までお届けできます。通常の新聞発行作業とは別に行うので、いつ何時でも発行が可能というわけではないのですが、そこは新聞社ですから、号外を出すとすればやはりテンションが上がってガンバリます。

そして、その役割は時代とともに変化しつつあるのを感じます。ニュース速報が携帯電話に飛び込んで来る昨今は、ニュース媒体という側面よりも「記念品」として受け取っていただくことも多い、と思っています。

例えば、最近出した号外に「なでしこ世界一」と「民主代表 野田氏、あすにも首相指名」があります。多くの人がこれらの結果を知っていながら、両方とも受け取りそのものは

好評でした。しかし、「なでしこ号外」の人気ぶりは「野田さん号外」の比ではありませんでした。「首相はしょっちゅう代わっているから」という理由を差し引いても、手元に置いて何度も読み返したい、と思わずにはいられないのはどちらか。読者は正直です。

そんな号外の「記念品」的な特性に着目して、朝日新聞



大阪本社では、「朝日パーソナル新聞」=写真=を発行しています。

お客様からの写真とメッセージを基本に、「朝日〇〇新聞」という題字（〇〇は、子供の誕生から入学・卒業・結婚・送別・定年・還暦・ペットなど）を付け、A3判両面カラーでお作りします（上質紙を使い5枚3980円です）。

「personal@asahi.com」まで、何も書かない空メールをお送りいただければ、資料をメールで返信いたします。ぜひお試しください。（なかじま・やすし）



今秋の「地歌・上方唄と座敷舞の勉強会 第8回あらたま会」のご案内

上方文化評論家の福井栄一さんから

■10月22日(土)午後2時、大阪市中央区徳井町1-3-6の山本能楽堂(国登録有形文化財)で。
(大阪市営地下鉄谷町線・中央線「谷町4丁目」駅下車4番出口から徒歩4分)電話06-6943-9454

- 座敷舞『夕顔』『淀川』『鐘が岬』『木津川・昔噺』『浮舟』『菊の露』『松竹梅』を上演。演目解説は上方文化評論家の福井栄一さん。
- 入場料1000円(全自由席)問い合わせ・チケットの申し込みは、あらたま会事務局(電話:06-6762-9118)へ。

朝日21関西スクエア 会報 No.138

●スタッフ

富永伸夫、浅野稔、安川嘉泰、小林正典、天野剛志、橋本正人、東山正宜、園真規子

●事務局

〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4 朝日新聞大阪本社内
TEL 06-6231-0131 (内線5048) FAX 06-6443-4431
E-mail square.k@asahi.com (PDF会報の希望はこちらへ)
URL <http://www.asahi.com/kansaisq/>